きょうようときょういくのままに ㉒

動画　用途　思考法

東京学芸大学名誉教授　篠　原　文陽児

本年９月初め、タイ国はバンコクとチェンマイから、筆者あて、ほぼ同時に飛び込んだ２通のメール。いずれも、2002年以来のユネスコ事業を通じた仕事仲間からである。両者とも、SDGs(持続可能な開発目標)に関する草の根民間交流の企画の会に出席し情報交換を、とのようである。両メールとも、関西在住の筆者の同僚がチェンマイで合流すると記されている。彼は環境教育のスペシャリストである。直ちに、いく、と返信。

SDGsは、新聞やテレビなどを通じ、最近、たびたび目や耳にするようになった。本連載でも、教育の質に関連し、ほんの少し紹介したことがあるので、本稿では、触れない。

本稿の「ねた」は、タイ国内に40校あるR大学の一つでの会を終え、宿泊先のホテルに向けチェンマイ旧市街を南に移動中のクルマの中、同僚との会話にある。クルマは、一部朽ちた城壁が、かつての政治・文化の中心としての隆盛を気づかせるに十分な、ところどころ緑のある通りを走る。

彼曰く。「篠原さんは、いつも写真ではなくビデオを持ち撮影しているが、それをどうするのか？データベースでもつくっているのか？」

「データベースだなんて。ビデオは、やはり、臨場感が伝わってくるし、何よりも、今、こうして動いているクルマの窓越しからだからね。それに、カメラでは、なかなか、ベストショットが撮れない。どうしても、ブレちゃう。」

「ベストショット？」

「カメラの連写でもいいんだけど、ね。」

……

動画は静止画の集まりで、１秒あたりの静止画数が画質を決める。単位はfps。ぱらぱら漫画の原理である。その逆、つまり、動画で撮っておけば、ビデオ編集のソフトを使い、たとえばブレが目立たない静止画を抜き出せる。ただし、現在、家庭に普及し筆者の使うビデオカメラの静止画は、画質があまり良くなく、ビデオから抜き出した静止画はサイズが小さめ。それでも、何度となく臨場感に浸れたり、静止画にでも残せたりできる可能性のある代替で、筆者の今は、こうした利用である。

一方、家庭というよりも学校等で導入可能な4Kビデオカメラの静止画は、かなり高画質、かつ、サイズは比較的大きく、写真として残すことができる。もっとも、4Kビデオカメラは、高価であり、データサイズがかなり大きく保管に苦労するし、4Kに対応したテレビやパソコンがないと再生が難しいという悩ましさがある。家庭での利用は、まだまだ先の話か・・・。と、そんな中、4Kビデオの編集ができる機能のフリーソフトがあったり、つい先ごろ市場に出たスマホの最上位機種では、３つのカメラがどれも60fpsの4Kビデオに対応している。また、クルマに取り付けられるドライブレコーダーでは、クルマの前後を録画できる２台のフルハイビジョンカメラのモデルなど、**用途**の可能性を追求した結果としての多種・多様な機種。画質も機種も、用途による使い分けである。

地震や台風による数多くの痛ましい出来事が報じられている。あらゆる可能性を想定し、常に代替案をもってことに挑む**思考法**を基礎・基本とする視聴覚教育と教育工学。100年といわず、少し先を見つつ、さて、今、何ができるか。